

森が元気にしてくれる

田村早苗（公益社団法人青森県林業会議参与）

冒頭に、東日本入会・山村研究会事務局より申し上げたい。本会はこれまで毎年8月に研究大会を開催し、基調講演、事例報告、行政による施策に関する報告および大会参加者を交えた討論を行ってきた。会報はこの研究大会の内容を掲載し、第12号まで発行している。しかし、新型コロナウイルス感染拡大のため、2020～2022年度（年度期間は8月1日～7月31日）の3年度に渡り研究大会を断念した。この間、会員との交流を継続するため「特別号」を発行し、運営委員メンバーが山村および森林林業について多様な視点から問題関心を提示した。本年度の2022年度は研究大会を開催できなかったが、会報第13号として本誌を発行することとした。内容は当初に報告をお願いしていた、滝沢裕子氏（当時岩手大学農学部特別助教、現鹿兒島大学特任助教）、山内日出夫氏（宮城県入谷生産森林組合理事）、天田慎一氏（林野庁経営課）より原稿を頂き、各々の内容について造詣の深い会員に捕捉とコメントを担当して頂いた。2023年度は8月下旬に対面にて研究大会を開催したいと考えている。会員各位のご理解とご協力をお願いしたい。

前出特別号の中で、泉桂子さんが地元のNPO法人が主催する「山仕事初級教室」に参加した体験を楽しく報告され、参与観察の結果を次のようにまとめている。「森林は社会の一要素」と捉えた場合、森林は社会における重要な要素である心身の健康をもたらす。泉さんは日頃から運動不足で軽い持病（適切な表現でないかもしれませんが）があったが森に通ううちにこれらの症状は改善し、時に億劫と思える家事（誇張した表現かもしれませんが。泉さんごめんなさい。）もやる気が出たという。また、メンバーたちの高齢をものともしない、その体力気力ともに充実した活動ぶりを観察している。そして、残された課題として活動主体と他者との交流を観察したいと述べている。

そこで、本稿ではこの課題を引き取り、私の体験をまとめてみたい。私は2007年に森林を所有した。目的は一人で安心して森を歩きたかったからだ。東京から青森に居を移して土地勘がない中、自分一人で楽しめれば良いと考えていた。その森は自宅から車で30分ほどのところにあり、下見した時に斜面いっぱいカタクリが咲いていて気に入ってしまった。面積は17haである。半分は広葉樹林、半分は広葉樹を抜き切りしてヒバを植栽した針広混交林である。私は遙か広がる森の景色が好きで「遙林山ようりんやま」と名付けた。

ある時、知人が遙林山で春の集いをやろうと言い出した。彼は時々私を八甲田山の道なき道に同行させた山行きの師匠だ。彼が知り合いに声をかけ、数人で植物を見ながら散策した。夜は酒を酌み交わしながら、津軽の自然や暮らしの昔話を聞いた。面白かった。参加者が参

加者を呼ぶ中、ある方が植物目録を作るという。更新して現在、草本183種、シダ類23種、木本89種がリストアップされている。中には稀産種もあった。集いを続けていると、ある方がコケ調査をしたいという。興味を持った数人が後日、数回調査して蘚類39種、苔類8種を確認した。こちらはまだまだ続きそうだ。常連メンバー、新メンバー、お久しぶりメンバーなどが入り替わり立ち替わり集って、春の集いは欠かすことなく、昨年14回となった。

ある時、知人が漁師を紹介してくれた。遙林山はすぐ下にあるホタテ養殖を中心とする集落の共有林だった山で、漁師はその集落の漁協の常任理事だった。これをきっかけに漁協メンバー、林業関係者、行政等を集って集落センターで森林と漁業振興に関する講習会を行うようになった。お目当ては講習会の後の大宴会である。集落の女性陣たちによる海の幸満載の手料理が並び、酒が進むと50人を超える人々があちこちで車座となり賑やかとなる。交流を続けていると、ある漁師が山の管理を手伝いたいと「遙林山を守る会」を作った。来られる人が集まり、年3回程度活動している。これまでに排水パイプ設置、側溝掃除、風倒木処理、植栽したヒバの下枝払い、間伐の補助作業等を行った。地元の土木会社と協力して不要になったバンガローを入手し、小屋も設置した。講習会は新型コロナウイルス感染拡大のため2019年までの10回で休止しているが、守る会は活動を継続し、今年で12年目となる。

近年、地域のサードプレイスでつながる取組みが活発だという。家庭（第1の場）でもない、職場（第2の場）でもない、第3の場におけるつながりである。ある本によると、サードプレイスの活動は次のように分類される。地域のNPO、こども食堂、コミュニティカフェ等は自発的・目的交流型、自治会、消防団、PTAは義務的共同体型、地元の居酒屋やパブなどは自発的・社交交流型などである。人々が地域とゆるくつながる自発的・目的交流型の活動は、多様なやり方・展開をみせるのだが、次のような共通点が指摘されている。一つは、起点は個人の「小さなやりたいこと」であったが、ゆるいつながりが共感する人々を集め、多くの偶然を生み、始まりは意識しなかった地域貢献に結びついていく。もう一つはゆるいつながりにより、地域を好きになる人が増えていく。人と人とのつながりが地域を好きになる後押しになっているという。

遙林山の15年を振り返ると、出入り自由のゆるいつながりが細々だが途切れることなく続き、広がっている。つながる人々のバックグラウンドや関心は多様であり、思わぬ化学反応が起きる。私は遙林山に集ったある方の影響でこれまで全く見向きもしなかったあるものに魅かれてしまった。当初の目的のようにひとりで森を歩いていたら見つけれなかったであろう、新たな目標を見つけることとなった。新たな人生を始めるような心持ちである。

ゆるいつながりはゆるい絆ではなく、確かな絆となっている。個人の実感で恐縮だが、私は何かあったらあの漁師たちが助けてくれると確信し、かつ安心している。森が元気になってくれる。